

第一次世界大戦とロシア人哲学者たち

林 由 貴

はじめに

いわゆる「第一波」世代といわれる、十月革命後の亡命ロシア知識人は特異な立場に置かれている。あるいは、彼らはそのような特殊な環境に放置された者たちであるとも、そうした状況を自ら選択した者たちであったともいえる。それら解釈のいずれを採用かによって、彼ら自らが、同時代の歴史的状況に対して受動的であったか、あるいは、能動的に生きようとしたか、存在意義が大きく異なる。筆者は後者の態度に注目し、彼らの努めて進歩主義的な発想の展開について、以前大まかに論じたことがある。¹それは、文化の世界で伝統的にロシア知識人に付与されてきた象徴的なイメージとは異なるものである。

例えば、トーマス・マンの『魔の山』に現れる、ショーシャ夫人らロシア人たちに託された、あの際立った非合理性。ドイツ国民の「理性」を背負ったハンス・カストルプ青年もまた、鉄兜を被り、第一次大戦という非合理性の渦に飛び込んでいく。第一次大戦期、危機に陥った西欧哲学者の間で、茫漠とした存在感を放つロシア知識人たち。しかしマンの創作に現れるロシア人像は、必ずしも西欧に旅し、暮らし、そして亡命するに至った当時のロシア知識人の実像とはやはり完全に一致することはない。我々は、おそらく西欧文学に登場するあの「非合理的」なロシア人のイメージから一旦離れる必要がある。そして当時のロシア知識人は、西欧知識人として行動していたし、何より、彼らの愛弟子であったことは忘却されたいよう。

亡命哲学者セルゲイ・ゲッセンは新カント派リッケルトの最も忠実な教え子であったし、そのリッケルトからやや疎まれていたことで有名な精神科医ヤスパースに博士論文の指導を受けたアレクサンドル・コジェーヴは、フランスの哲学界、欧州の官界などを同時に渡り歩き、戦後は異色の「ヨーロッパ人」として存在感を示したことも、よく知られている。²

ゲッセンはといえば、伝統的な西欧の合理主義的な思考と、それに対する非合理性の

¹Хаяси Ю. «Отечество и служение»: эволюция общественно-научной мысли русского зарубежья // Философский полилог. Вып. 1. СПб., 2017. С. 63-76.

²ドミニック・オフレ (今野雅方訳) 『評伝アレクサンドル・コジェーヴー 哲学、国家、歴史の終焉』パピルス社、2001年。

境界に立ちつづけた。そうした絶妙なバランスは、ドイツ、チェコからポーランドへと続く流転の学究生活において確立されたものだった。

ソローキナによれば、大戦期および革命期以後亡命したとされるロシア知識人は、実のところ、世界が混沌に陥る前から既に何らかのかたちで西欧へ旅したり留学したりしていたのであり、決然と亡命したというよりは、情勢の急転により、そうした西欧留学生活や学術的な出張を苦しくも「延長」せざるを得なかったにすぎない。したがって学者たちの「亡命」については、極端に政治的な意味だけを付与することはできない。³

ゲッセンという哲学者の場合、第一次革命期にはフライブルクでリッケルトやマイネッケの講義を受け、マールブルクでコーヘン、ナトルプ、カッシーラー、そしてフッサール現象学の最前線に触れ、1909年に『個の因果性 (*Individuelle Kausalität*)』により首席で哲学博士号を取得した。⁴ 第一次大戦期と革命期はロシアに戻り、ペテルブルクやトムスクで教壇に立ち始めるのだが、教鞭を執っていたトムスクからペテルブルクへ戻り、そこからフィンランド経由でベルリンへ事実上亡命したのが1921年であった。⁵

ゲッセンの自伝には、いわゆる革命に関して叙述する箇所はほとんど無いと言える。実質的には政治活動に直接コミットした跡は見当たらず、若い学者として駆け出したばかりの学究の多忙さの合間に「革命」があったかのような素っ気ない社会描写は、当時彼を突き動かしていた多彩な学問的努力の追憶とスケッチにあたかも押しつけられている。

ソヴィエト政権を嫌い、トランクに論文草稿をぎっしり詰め込んだ「亡命」は「軽率で楽観的な」意図により行われた⁶のだったが、その後もプロイセン国立図書館で資料収集に明け暮れるなど以前の学究生活が途絶えることはなかった。

亡命の翌年にあたる1922年には、先述のアレクサンドル・コジューヴといったベルリンに暮らす他のロシア亡命哲学者やカルツェフスキーなど言語学者の知己を得るなど交友関係を広げつつ、『教育学の基盤』をフライブルクで脱稿し、1923年には公刊に漕ぎつけている。⁷

本稿では、こうした西欧における学術研究活動の無期限延長を余儀なくされたロシア知識人たちの、ある種、意外かもしれない合理性への拘りと、普遍的視野の希求という大きな流れのうち、第一次大戦期における動向を描き出したい。

そのために、第一次大戦期に同じ学会に参加し、戦時のナショナリズムという共通論

³ Сорокина М.Ю. Российское научное зарубежье versus русская научная эмиграция: к определению объема и содержания понятия «Российского научного зарубежье» // Ежегодник Дома русского зарубежья им А. Солженицына. 2010. С. 75-94.

⁴ Гессен С.И. Избранные сочинения. М., 1999. С. 730.

⁵ Там же. С. 745.

⁶ Там же. С. 747.

⁷ Там же.

題で討議していた文学者メレシコフスキーと哲学者ゲッセンの言説を取り上げ、彼らがロシア知識人としてどのように同時代の状況にコミットしようと試みたのかを考察する。

なお、本稿において筆者は敢えてメレシコフスキーの多岐にわたる才能の一つである詩人としての側面に重きを置いた。亡命神父ゼンコーフスキーが「高才のディレッタント」と評価した⁸ように、宗教や哲学に関するエッセイ、評論、詩、長編小説などジャンルを問わず多面的な才能を発揮した人物であるが、実際にはメレシコフスキーを何者かに定義することは困難である。恐らく彼を、ゲッセンと同様に「哲学者」と呼ぶことも不可能ではないが、筆者の関心は、同一の学会で同時期に発揮された、両者の戦争に関する言説のロジック（論理）の類似とレトリック（修辞）の差異を対比させることにある。

まずはメレシコフスキーが有する、世界を描く詩人としてのレトリックと、世界を判断する哲学者としてのロジックを読み分けることで、詩人的なレトリックが、いかにして哲学的なロジックによって書かれたものと隔たっているのか明らかにする。その上で、メレシコフスキーの哲学的な言説が、ゲッセンのような専門的な哲学者のそれとはどう異なるのかを探る。

文学者と哲学者という一見して全く異なる思考回路を持つ人びとが、ナショナリズムという共通の問題に対し、いかなる論理と修辞をもって取り組んだのか、この点を明らかにすることが、本稿の目的である。

1. 第一次大戦期のロシア哲学者たち

第一次大戦期の西欧における哲学者の振る舞いが、戦争という非日常的な状況に呼応して騒然となった当時の学界の事情を書いた研究は内外に少なからずある。現在名の知られている大抵の哲学者たちが戦時の喧伝にコミットしていたことは、第一次大戦であればベルクソンが、第二次大戦であればハイデガーが想起されるし、ロシア知識人も例外でない。

直接戦争にコミットしないとすれば、銃後で自分たちの精神的な「正統性」を主張するのが常であったことは、当時開催され学会の記録を紐解けばすぐに明らかになる。⁹

カテリーナ・ザンフィは、哲学者が「政治的プロパガンダ」に加担せざるをえなかつ

⁸ *Зеньковский В.В.* Мережковский, его идеи // Д.С. Мережковский: Pro et contra: личность и творчество Дмитрия Мережковского в оценке современников. Антология. СПб., 2001. С. 428.

⁹ *Ермишин О.Т.* (сост.) Религиозно-философское общество в Санкт-Петербурге (Петрограде): история в материалах и документах в трех томах 1907-1917. М., 2009. 左記文献に収録された原資料として、以下も参照。Записки С. Петербургского религиозно-философского общества. 1914-1915 гг. Выпуск VI. Петроград., 1916.

た暗い歴史を明らかにしている。¹⁰ 第一次大戦期にベルグソンを中心として展開された運動は、「敵国」ドイツの「野蛮さ」に対抗し、ヨーロッパの真の学問と普遍性の体现者であるフランスの学界を「十字軍」であると唱えるものであった。

第一次大戦の7年前に立ち上がったサンクトペテルブルク宗教哲学会は、開戦からロシア第二次革命の1917年まで継続した。当時の文壇や学界の第一線にあったロシア知識人たちが、過激な表現も厭わず、戦争に関する論争の渦に飛び込んでいった。

大戦期における大衆煽動的な流れにむしろ飲み込まれた者が、安易な「カント」批判、すなわち交戦国由来の哲学者を単に非難するというようなあまり学問的ではない言論活動に隷属してもいた¹¹一方で、より冷静な分析眼をもって論じる一派もおり、全ての哲学者が時の濁流に流され政治化したわけではない。

その代表的な人物として、キリスト教哲学にも造詣が深いメレシコフスキーが挙げられる。彼はある一面では戦争という社会的、歴史的現象を詩的、文学的に表現し、破壊に見舞われた世界を荘厳に描き出そうとするなど、詩人としての紛れもない欲求を隠すことはなかった。

『西の神秘：アトランティスヨーロッパ』（1930）は、第一次大戦の事後に執筆された作品ではあるが、戦争という社会的、歴史的事件に詩人が取り組んだ文学的成果である。同作では、20年代後半に欧州の亡命ロシア科学者により出版された理化学の論文や、『パスレードニエ・ノーヴォスチ』等のロシア亡命者編集による在外ロシア新聞記事から現代兵器や化学の語彙を引用してリアリティを担保しつつ¹²それら最新の語彙を、プラトンの対話篇に登場する伝説の島アトランティスそして旧約聖書的な神秘的なモチーフと有機的に融合させつつ、第一次大戦の化学戦の惨状を描き出す。

空想と現実の両世界がパラレルに展開されるテキストにおいて、同時代史は一つの叙事詩に変容している。また、詩学、古典、現代の学術等を自在に横断する間テキスト性は、あたかも化学合成を彷彿とさせる。

散文調に書かれてはいるが、当時のジャーナリズムに現れた淡々とした「戦争の事実」を伝える無機質で断片的な語彙を、聖書の壮大な「終末」のイメージに異化させる技などは、まぎれもなく詩人の才能であるというべきものであろう。

とくに以下の XXIII の部分は、まったくジャーナリストの文体と見紛うものであり、単独では特別の印象を催すものではないが、4年にわたり継続され常態化してしまった戦争を「カインの煙」とアトランティスのイメージと交錯させることで、鮮明な「戦慄」

¹⁰ C. Zanfi, *Bergson et la philosophie allemande. 1907-1932.* (Paris: Armand Colin. 2014), pp. 243-245.

¹¹ Василевский Г.А. Виновата ли германская культура? // *Ермишин* С. 134-144.

¹² *Мережковский Д.С. Тайна трёх. Собрание сочинений в 20 томах.* Т. 14. М., 2017. С. 678.

の感覚を取り戻すことに成功している。

XXII

1915年4月はドイツ人によって初めてフランスの前線で窒息性ガスが使用された年となった。6キロにわたりばら撒かれた塩素の波が2時間で5000名以上のフランス兵を毒殺した。ロシア人はこの黄褐色の塩素の霧を「カインの煙」と呼んだ。今の今まで毒ガスの帯はロシア上空にまで伸びているのである。無際限な兄弟殺しの魂が「カインの煙」を使ってロシアを毒に中らせている。

XXIII

数年に及ぶ世界戦争の化学は多大な発展を遂げた。1918年の終戦までに300近くの毒ガスが明らかになっているが、現在は1000以上である。それらのうち、ホスゲン（注：毒ガス）は偶然に漏出したとしてもハンブルク全体を殺傷するほど毒性が強いといわれる。<...>

XXIV

ニューヨークに於いてヒルトン・アイレ・ジョンズ（ママ）博士が最近報告したところによると、新たに発明されたガスは「灯火を消すごとく」容易に一軍を殲滅させる。ガスを詰めた爆弾の投下は化学戦の主要な条件である。<...>

XXV

第一のアトランティスは、外からきた火山性の劫火により消滅させられた。恐らく、第二のアトランティスは内からの劫火により滅びるであろう。「我は、お前の内側にある、お前を焼き殺してもしまう炎をお前から取り除いてやろう、だがそうするなら、我はお前を灰に変えてしまおう、と神は言った」。¹³

こうした作品が鮮烈な詩的イメージを喚起させる一方、メレニコフスキーは時としてきわめて合理的な言論の指導的立場にも立つこともあった。1914年以降のサンクトペテルブルク宗教哲学会で同胞の論理的な破綻を批判していたメレニコフスキーは、詩人として情緒的に感じ取った内容を主張するのではなく、他者の思考の方法それ自体を鋭く批判しており、哲学者のような存在感が際立っている。

まず彼は「感傷的」要素を伴うナショナリズムに批判の矛先を向ける。それはドイツなど外国由来の愛国的な排外主義であり、「ロシア的ゲルマニズム」にすぎない。排外主

¹³ Там же. С. 228-229.

義を根本的に成立させているのは外国の思考方法の模倣であり、それらは自らの頭で考えない者たちの所業であるとの批判を行なった。¹⁴

以下は、象徴派詩人の一人であったセルゲイ・ソロヴィヨフによる報告『現代のパトリオティズムについて』（1914年12月）に対するメレシコフスキーの批判である。

同報告においてソロヴィヨフは、文化の概念が学問や産業の進歩の概念と混同され、人間を墮落させている西欧の風潮は非難に値する、またそのような事態が生じたのは、信仰の代わりに物質的な成果としての「文化」が「暗い偶像崇拜的な法則」として人間を支配しているからであると言う。さらにロシアにおいて文化と宗教は一致しているため、そのような墮落は起こっていない¹⁵とする持論を展開した。

メレシコフスキーは、物質と精神、文化と宗教という意図して対立的に用いられた概念に着目しソロヴィヨフを批判した。

文化がキリストと一致するのだとお考えのようだが、これはプロテスタントの発想で、非常に深く強い考え方である。このような思考を与えた唯一の国はドイツであったし、この発想においてはキリスト教と文化は対立しないというのに、報告者（注：ソロヴィヨフ）はこのことをよく考えていなかったがために、文化とキリスト教が対立しているのだ。それ以降、報告者はまったく訳の分からないことを言い始めた。「文化は学問的な進歩ではない」などだ。私はこれを絶対に理解できない。<...> もしソロヴィヨフの報告の「ロシア」という単語を「ドイツ」に置き換えたら、同様の報告はベルリンでも読むことができるだろう。¹⁶（下線は筆者）

ソロヴィヨフの主張によれば、物質と精神、文化と宗教は、どちらか一方が他方を墮落させる契機であり、あるいは互いに打ち消し合う要素として対立し、戦時のロシアとドイツという敵対関係と重なり合って、どちらが勝利するか、あるいは優位か、という価値判断が引き込まれている。すなわち、物質の豊かなドイツ、高い精神を有するロシア、文化の優れたドイツ、宗教に優れたロシア、という対応関係が上の文脈には込められている。

さらに、排外主義と同義であるところのナショナリズムは、他方より自己の宗教が他国のそれよりも優れていることを主張させる。その際、相手に対して何らかの差異があることが優位の前提となる。しかしドイツにせよロシアにせよ同様にキリストを信仰す

¹⁴ Ермишин. С.113.

¹⁵ Соловьев С.М. О современном патриотизме // Ермишин. С. 98.

¹⁶ Ермишин. С. 112-113.

る。このことに差は無い。

私は伺いたいのだが、報告者（注：ソロヴィヨフ）のイデオロギーをドイツ・ナショナリズムと隔てるものは何であろうか？ 無論、例の感傷的なアクセントをつけて言うのは簡単である。我々の民族的なキリストはビザンツ的なアイコンである。だが、ドイツ人すらも感傷的なアクセントつきで説明しうるだろう。我々のキリストは中世のゴシック様式であるとね。一体、何によってゴシックのキリストよりビザンツ様式が優れているというのかね？¹⁷

そこで、「ビザンツ」や「ゴシック」といった文化的様式の差を持ち出すことで、唯一のキリストの信仰の「様式」の差を問題化し、それらのいずれの文化的様式が勝っているか、という議論に貶める。メレシコフスキーが批判するのはいずれかの国家の正統性を主張するための、言葉の遊戯にも似た応酬であり、もはや詩人も哲学者も、文化それ自体から目を逸らしていたことであった。

2. 時代に籠絡される知識人

前章で引いたザンフィが指摘するところの「哲学者」が、時代の潮流に飲み込まれたかのようにプロパガンダに加担する「政治家」的側面は、哲学者が自らのディシプリンを越えて同時代の状況に積極的に参加した結果であると言える。戦争という状況の傍観ではなく、何らかの突破口を見出そうとした行動の帰結であったとすれば、そうした「政治化」の意義は再考されなければならない。

一般的に言って哲学とは思考の技術であり、それ自体は人の生き方や道徳の内容を直接または間接に指し示す世界観や宗教観ではない。しかし、既に引いたいくつかの事例に見られたように、哲学者が政治化することによって、戦時におけるロシアの使命とは何なのか、フランスはどうすべきか、といったきわめて政治的、宗教的な内容が主張される傾向が見られ、しかもそれらは私的な見解を超えてはいないことが多い。

従来ロシア思想史研究には、大戦という国際的な現象がロシア哲学者に一層のエスニックな自覚を与えたとする見解が多くあるが¹⁸、はたして体制外の哲学者の言論は、どの程度まで思考の技術としての哲学の体を成していたのだろうか。

¹⁷ Ермишин. С.113.

¹⁸ 松原広志「第1次世界大戦開戦とロシア・インテリゲンツィヤ：イヴァーノフ=ラズームニクとネオ・スラヴ主義者たち」『ロシア思想史研究』5巻、2014年、71-92頁。大須賀史和「第一次大戦期のスラヴ主義—ベルジャーエフとモスクワのスラヴ派」『現代文芸研究のフロンティア VII（スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化）』（北海道大学スラブ研究センター）No. 9、2005年、116-148頁。

佐藤は、第一次大戦期のロシア哲学者の言論活動は、体制に迎合し、また要請されて行われたものではなく自発的なものだった、と断った上で、それらが単純な愛国心の表明でも、国益の擁護のための言論ではなく、哲学者（ベルジャーエフ）がエスニックな思想を用いて戦争に自ら意義を与えたかったのだ、という。¹⁹

一方で戦争をテーマとした言論は、戦争という不可知の状況に置かれた知識人が理性的判断を喪失していく契機でもあり、また戦争を理性的どころか自発的に説明する力を失わせる場となっていた。この証左となるのがメレシコフスキーの妻、ジナイーダ・ギッピウス日記である。

当時のロシア知識人がそれまでの知性的な態度を突如変え、学会で豹変したように過激な言葉を仲間に浴びせ、言葉による攻撃により憔悴してゆく様子が伺われる。ギッピウスは、戦争に意義を与えるという行為が途方もない試みであると理解し、戦争という人間と社会に対する巨大な「否定」を受けると、今度は萎縮した己の考え方を戦争の「受容」に落ち着かせようとした。

1914年12月14日

<...>

先月、宗教哲学会の集まりがあった。私の報告もあった。私は大まかに歴史の「偉大なる道のり」について（もちろん全キリスト教的見地から）、段階としての歴史的瞬間について、当然、目下のことについて語った。ようは、戦争が「凋落」であるということ。私は戦争を形而上学的にだけでなく歴史的に批判する...、つまり、私の歴史形而上学は、それ自体戦争を否定するのである。だが実際には戦争を認めているのだが。<...> ²⁰

こうした言説には、当初、戦争によってもたらされる非人道的行為や不正を無視できないという何らかの正義感が含まれているが、それゆえにこそ、戦争を頭ごなしに否定し、我には関係のない出来事として無視することはできなかつたといえる。自分が社会にコミットする限り、戦争に動員される同胞の姿を見ぬわけにはいかず、戦争の受容を肯定せざるをえないからである。

戦争には行かなければならない、戦争は「受け入れなければ」ならない...だが受け入れるとはいっても、戦争の根源を否定しつつ、それによって暗くさせず、陶醉させず、自己も、

¹⁹ 佐藤正則「ロシア宗教哲学者と世界戦争（第一次世界大戦とロシア）」『ロシア史研究』96巻、2015年、62頁。

²⁰ Гиппиус З.Н. Собрание сочинений. Т. 8. М., 2016. С. 178-179.

他者も裏切らず内面を「凋落」させることなくということなのだが。<...> ²¹

ギッピウスには、戦争の「根源」は否定するというような抽象論で締めくくることがやっとならなかつた。サンクトペテルブルク宗教哲学会では、戦時社会を批判する者をさらにまた別の者が感情的に批判するという不毛な循環に陥っており、互いが互いを消耗させるような議論のなかでついに彼女は口をつぐんでしまう。

私は抽象的だったと非難された。<...> いつものように助け舟を出してくれたのはM。(注：A. A. メイェルのイニシアル)²² と、反ナショナリズムと戦争に関しては同じ思想を持つドミートリー（注：メレシコフスキー）である。ロシアの困難な問題は言うまでもないが鋭く立ちはだかっている...これら二度の例会は、まともな戦争について無意味な「お喋りをする」だけの会になってしまった。知っていること、思っていることは腹の中に持っておけ。これほど病んで、苛烈になった今はなおのこと。それほど敵意なのだから。²³

同学会においては、全体的に、精神と物質、歴史、文化と宗教、戦争など様々な抽象的な概念が大上段に振りかざされていた。それら議論の抽象性は、哲学だから抽象的なのではなく、具体的に建設的なテーマも、建設的な事業を実現するためのロードマップの提案のいずれもが存在しないことによる、無と否定の世界の抽象性である。

ギッピウス本人の報告にしても例外ではない。その論旨は戦争という状況をいかに「形而上学的に」耐えるかという発想を出していない。

さらに同時期、彼女は戦時の混乱に乗じて発生したポグロムの犠牲となったユダヤ人たちが逃げてくる有様を目の当たりにする。ユダヤ人が見せてくれた手には指が無かったのだが、彼らに暴力を振るったのはドイツ人ではなくロシア人であるという事実を知り、愕然とする。²⁴ 戦争に自らの言葉で意義を与えることができないばかりか、1914年夏の段階では既に己の「感情」をも信じてはいなかったのである。

私は戦争に対する権利も言葉も持たないが、強いて言うなら、まだ戦争を感じているだけである。だが私は感情を信じない。なぜかという、感情は言葉とつりあうわけでないし、何か高次元のものによってすでに正当化されているわけでもない。そして真実によって認め

²¹ Там же. С. 179.

²² Там же. С. 587.

²³ Там же.

²⁴ Там же. С. 175-176.

られてもいないから。²⁵ (下線は筆者)

これに関し、ゲッセンが学会で発表した『ネイション (民族) の概念』(1915) にも例の「感情への不信」に近い考えが引き合いに出されている。ギッピウスが表現の限界を感じていた「私によって感じられた戦争」のことを、ゲッセンは未だ言葉を持たない「生の経験」と表現する。しかし彼は、「言葉無き経験」を認識のレベルに引き上げることにあくまで拘った。

生の経験はそれ自体では盲目的で言葉がない。<...> 我々はそうした経験を認識に引き上げ、思考の対象としなければならない。だから生の経験を明瞭にそして体系的に自覚することは不要なことにはなりえない。²⁶

また彼は学会でただ一人、ロシアやドイツといった、多くの発表者たちがあれほどまでに固執した敵、味方の国家の固有名を用いずして、今次大戦について語ろうとした。つまりゲッセンは、他の報告者が没頭していたように、戦争という現象に何か固有で象徴的な意味を与えようとしたのではなく、努めて戦争における思考の技術や人間存在の様式について論じようとしていた。

実際、哲学的な意味での戦争とは何であろうか？ <...> 我々は何のために我々が闘っているのかということ、そして民族の名の下に脅かされた、我々の人間性について覚えておかなければならない。<...> 我々皆が、我ら民族の中に現れた人間性のために命を捧げることを覚悟しているであろう。²⁷

上の「民族の名の下に脅かされた人間性」というくだりは注意深く読む必要がある。すなわち普遍的な「人間性」のために「命を捧げる」というのは、民族というイデーのためにあなたの生命が犠牲を強いられるとすれば、そうしたことを強いる戦争と私たちは闘わなければならない、という意味なのである。

にもかかわらずゲッセンは、世界市民主義者が唱える「有頂天な」反戦の主張は全体に伝染しやすく、良心的兵役忌避者を生むだけであると否定的に書いた。²⁸ 反戦的な言説を書きながら、同時に戦争を否定していない。

²⁵ Гиппиус. С. 176.

²⁶ Гессен С.И. Идея нации // Избранные сочинения. М., 1999. С. 79. 初出は1915年。

²⁷ Там же. С. 102-105.

²⁸ Там же. С. 83.

他方、クプリーンやソログープといったペテルブルクの知識人たちがこぞってドイツの罵倒に傾倒していく中で、ギッピウスはあらゆる戦争は人間全体のレベルを下げるもの²⁹だと、抽象的なヒューマンイズムを唱えることで、時代に呼応した者たちから離れようとした。いったい、彼らの言説の違いはどこにあるのだろうか？

すなわち、ギッピウスが「平和」（和平ではない）という高い次元にある観念を見ているとすれば、ゲッセンは戦争における人間を凝視しており、平和や反戦といったイデーの内容の主張というよりも、戦争における人民に関する分析を提供している。

ゲッセンの報告もきわめて抽象的で観念的な語彙を駆使した表現なのだが、実際に彼が見ているものは、ギッピウスが気に留めていた平和に関する「高次元の」何かではなく、実社会で戦争に動員され、「高次元の」事物を考えたくとも考えることを状況が許さない人々と、そうした人々が生きていかざるをえない実社会であった。

戦争は民族（нация）の防衛であるべきであるだけでなく、人間（человечество）の防衛であるべきである。まさにそれゆえ、戦争とは民族の防衛なのである。ではこの人間性（человечность）の防衛は、具体的にどのようなべきなのか？ 第一に、人道的な戦争の遂行である。すなわち領土獲得のために行われる民族的な迫害（национальное угнетение）に関するあらゆる行為の拒否である。そして、敵に対する適切な関係を持つことである。我々は敵の民族性と、つまり彼の愛国心に敬意を払わなければならない。<...>

何よりも、戦争と敵への過信的で軽率な態度を避けなければならない。³⁰ （下線は筆者）

これは、既に起こってしまい、いつ停戦に至るのかも分からない、戦争の遂行者ないし戦争に現在関与している人間を想定しての言説であり、ただちに「反戦」を主張するものではない。しかし、体制に動員され、国益擁護のために働くことを指示され、戦争に関与せざるを得ない自国、敵国双方の市民に宛てての具体的なメッセージとして発信されていると理解することができる。

ところで、「人間性の防衛」、「民族的な迫害の拒否」、「相手方の民族の尊重とそうした感情への敬意」とあるが、仮にこれらすべてが実践された先にあるのは、抽象的で実現の目途が立たない平和という概念ではなく、具体的な振る舞いや行動を要求する平和であると言える。

²⁹ Гиппиус З.Н. Ничего не боюсь. М., 2017. С. 211.

³⁰ Там же. С. 101-102.

3. 祖国イメージと貢献

第一次大戦中も戦後も、ゲッセンは政治化するのではなく、また体制との迎合を拒否する形で在野における言論活動に向かうでもなく、人間一般を対象とした哲学、さらに「人間に関する学」への抑え難い欲求から教育研究活動に転換し、これに打ち込んだ。『教育学基盤』（1923）に結実した成果は、第一次大戦のさなかに報告された『ネイションの概念』と一貫している。以下でその連続性のごく一端を紐解いてみたい。

哲学者ゲッセンが亡命後の戦間期にプラハの同僚へ宛てた一通の手紙には、彼が「愛国心」をどう解釈していたのかが書かれている。手紙にはいわゆる故国に関する独断的な「祖国イメージ」が教育規範とすり替えられる懸念が書き表されている。

以下からは、亡命作家ワシーリー・ネミローヴィチ＝ダンチェンコに、生き生きとした真の「感情教育」を委託しようと試みるゲッセンの亡命教育者としての一面を垣間見ることができる。

児童図書は、あらゆる虚偽のロマン主義と道徳的な故意なしに公刊されることがめったにないものですが、あなたは、幼い読者を惹きつけ、訓育し、真の人間性を伸ばし、まさにそのことによって本物の愛国心（パトリオティズム）を育むことがお出来になるでしょう。<...> というのも作家は感情を育むだけでなく感情に応えもするのですから。それに、再びロシア人読者の若年世代において、人間的な感情とパトリオティズムが勝利すると信じれば、あなたは再び彼らの人気作家におなりになるでしょう。³¹

実のところゲッセンは、第一次大戦中の混沌の時代には言葉として表現される以前の「生の経験」に対して悟性の力である認識の必要性を強調する。

哲学は、旧知の物のなかで我々を強くさせ、起こりうる猜疑を退け、我々の感情に意義と確信する力を与えてくれるだろう。³²

「旧知の物のなかで」というのは、「自分の過去の経験において」ということであり、自己の経験が全く及ばない未知の考え方に必ずしもすべてを委ねる必要はないと示唆するものである。しかし、体験から直に起こった感情は、悟性の力で制御されなければ猜疑を生むこともある。猜疑は人から「意義」や「確信」を奪い去り、前に向かって進むことを阻む。それゆえ未だ肯定的にも否定的にも作用しうる「感情」を、精神の肯定的

³¹ РГАЛИ. ф. 355. оп. 2. ед. хр. 160.

³² Гессен С.И. Избранные сочинения. С. 79.

な力に編み直すための悟性が必要である、とゲッセンは哲学の使命を訴えたのである。

反対に第一次大戦後は、上の書簡のように、悟性で統御される以前の「情緒」の力を積極的に訴えた。この時期は、哲学者の悟性ではなく、作家の創作的な感性と人間感情によって、また別の人間の感情に「応答する」という考え方が強化されている。さらに上の書簡における「パトリオティズム」の理解は、ゲッセンが戦間期に提示していた「民族」の概念と連動している。

すなわち民族とは、多様で全人類的な文化的使命に対して注がれた活動の、それぞれの集団の存在様式であり形式である。³³ また民族とはある固有の民族を超えた使命の実現のために払われた努力によって自然に生まれた成果であり、懸念の対象ではない。³⁴ つまり、それが他者や自己にとって異質な物からの脅威に対して単に防衛されるべき対象と認識されるのは誤りである。

以上のような考え方から、ゲッセンにおける民族観は遵守すべき前例でも規範でもなく、新たな使命が課され、自覚される度に絶え間なく続けられる創造のプロセスであり、文化的な進歩であるという理解へと導かれている。³⁵

こうしてゲッセンの民族と民族の教育に関する知見は、創作の概念と容易に共鳴しあった。ネミローヴィチ＝ダンチェンコに宛てた手紙では、特定の教育者の意図が反映された「虚偽のロマン主義」や「道徳的な故意」によって「民族の内容」と持つべき「祖国イメージ」が守られるべき歴史的な規定事項とされ、児童文学においてすらも、伝統的な文化の内容が刻一刻と変容する様子が描かれぬ傾向を指摘したのである。

ゲッセンは、これら「規定」の下では具体的で創造的な活動が伴わず、自己ではない何者かによってあらかじめ規定された反復運動と機械的動作だけが可能である³⁶ として否定する。なぜなら、これらは人が自らの使命 (момент задания) を発見する瞬間を無視するからである。³⁷ したがって彼の考えるパトリオティズムとは新たな創造を促す力に他ならず、それ自体が特定の民族の固有名を賞揚したり、あるいは名指しで貶めたりするものではないのである。

結びにかえて

二度の大戦を挟み、亡命を選択する人生において、ロシア知識人たちは思わぬ形で自らの実存を喪失する危機に晒された。亡命後、メレシコフスキーは古代ローマ文化への

³³ Гессен С.И. Основы педагогики. М., 1995. С. 345. 初版は1923年。

³⁴ Там же. С. 346.

³⁵ Там же. С. 335.

³⁶ Там же. С. 340-431.

³⁷ Там же.

歴史的憧憬と、尽きぬ創作のインスピレーションから第二次大戦前のイタリアを訪れる。彼の反ボリシェビズムと文明の薫り高いイタリアへの好意的な感情は、詩人を必然的にムッソリーニにも接近させることになった。³⁸

しかしメレシコフスキー夫妻は、自らが期待を寄せたファシストたちの精神に、彼らの創造的な欲求と精神的な動きに反する単純なメカニズムを見出した。時代の潮流への関与は、創造無きメカニズムの中に人間性と芸術の死を読み取った経験となったのである。

結局夫妻は、一世を風靡したが後世に断罪されることとなる体制からは自ら離れていった。³⁹ 彼らの場合、故意に作り直されていくファシストのイタリアから離れるのに、類稀な芸術的才能、すなわち、ゲッセンが言うところの創造の力が皮肉にも助けになったわけである。第一次大戦の経験は、メレシコフスキーの中では詩的な感性に一旦取り込まれて、『西の神秘：アトランティス—ヨーロッパ』（1930）として発表された。

こうした散文作品から第一大戦期に発揮されたメレシコフスキーの合理的思考を読み取ることは困難だが、文化と進歩の両概念の関連性を否定する同時代人たちの発想を激しく批判するあたりは、ゲッセンの文化の概念の理解とそう隔たるものではない。

他方、哲学者ゲッセンは第一次大戦後、典型的な哲学者たることを止めている。彼は概念や思考の説明者とはならず、第一次大戦後は専ら教育研究活動に精を出した。ヨーロッパ大陸における破壊の四半世紀と諸国の人民を見つめた哲学者は第二次大戦後、いよいよコスモポリタンな教育者として知られ、その独自の民主主義思想を投影した成果はイタリア語やポーランド語にも翻訳された。⁴⁰

ゲッセンとメレシコフスキーは共に第一次大戦を経験し、同じ学会で戦争について議論する機会を得たが、彼らの戦争に対する思考の差異よりも共通点を見出すことのほうが困難であると考えられてきた。多くの場合、彼らは文学者や哲学者といった専門性あるいは才能の種類によって分けられ、同類の知識人として解釈されることがほとんどなかったからである。

しかし、同時代人による戦争へのリアクションが病的な過激さを増していった時代、情緒的なナショナリズムを退けようとした点ではメレシコフスキーとゲッセンは紛れもなく同じ方向を目指していたのであり、非理性的な社会状況に対し極めて合理的な批判精神を発揮していたのである。

³⁸ Буткова О. Зинаида Гиппиус. Муза Д. С. Мережковского. М., 2017. С. 192-200.

³⁹ Там же. С. 196-197.

⁴⁰ N. Hans, "Sergius Hessen," *The Slavonic and East European Review* Vol. 29, No. 72 (1950), pp. 296-298.

The First World War and the Russian Philosophers

HAYASHI Yuki

The author examines the philosophical discussions, especially on nationalism during the First World War, which were reported in St. Petersburg's religious and philosophical society. Whilst most of the debates in the society were a simple refutation of the culture and religious consciousness of belligerents, Merezhkovskii and Hessen, as exceptions to their contemporary philosophers, had a similar rational sense regarding the political catastrophes in 1914-1915. The main interest of these intellectuals, who had no insistence on the ethnic and cultural predominance of their fatherland over their warring nations, was the notion of nationalism. The purpose of their reading of a paper at the meeting of the society during the war was a negation of colleagues' total absence of proper understanding of notions of culture and religion, which are not always relevant to the contemporary social and political conditions: a cause of nationalism, according to them.

The difficulty on this topic, which is still not well known in research history, is finding an agreement rather than estimating a variety of thoughts between two different types of intellectuals: a poet and philosopher. Hessen, as a philosopher, ceased from writing a typical philosophical explanation of cultural and historical notions after the First World War but turned his academic interests to an invention of pedagogical foundations: practical fields. On the other hand, Merezhkovskii's devotion to his contemporary world provoked acute criticism and assimilated the poet with a philosopher such as Hessen. It should be noted that their plans of commitment to their contemporary society were not rooted in an epidemic patriotism but on the intention of disturbing it, contrary to their colleagues.